



Invitation to Human Care Science

ヒューマン・ケア科学への招待

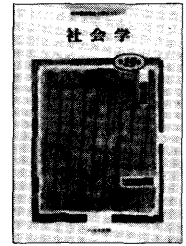


筑波大学

社会学的研究の成り立ちについて

おかもと ともちか
岡本 智周

共生教育学分野 教育社会学 共生社会学



社会学の課題

社会学が探究している根本的な問いの一つに、秩序問題と呼ばれるものがあります。「社会秩序 (social order) はいかにして可能か」という問いです。人間と人間とが関係を取り結ぶ時、両者の行動は本来的にはあらゆる可能性に開かれており、お互いの振る舞いは必ずしも相手にとって了解可能な範囲に収まるものではありません。人間相互の関係性は、自他の行動の二重の偶然性を前提とした複雑さ、難しさを常に帯びているといえます。

そうした複雑さを縮減させ、人間の社会関係を秩序立てていくのに不可欠であるのが、「価値と規範の体系」としての文化です。それは人が生まれながらにもつものではなく、多様な形態の教育を通して人間が社会化されることによって、初めて共有されるものとなります。社会とは、単に諸々の個人の総和としてあるのではなく、広い意味での教育作用を通して文化を伝達された人間の、相互関係性の集積として成立するものです。

それゆえいわゆる社会問題は、ある事象に関わる価値と規範が社会成員間で十分に共有されない状態において生じることにな

ります。この文化共有の不全状態を引き起こす原因の所在は、ミクロレベル (個人)・メゾレベル (人間集団)・マクロレベル (社会構造) の三位相に層化されますが、社会学研究はここでの後二者の分析に取り組んでいます。

共生社会に向けて

文化共有の不全状態とは、社会の成員の間で、それぞれが採用している社会的カテゴリ (社会現象を秩序化する枠組み) が一致していない状態であるともいえます。さらに後期近代と呼ばれる時代においては、近代社会が生み出した様々な社会的カテゴリこそが、むしろ人間に対する新たな抑圧の根拠となっているとも指摘されます。しかしまた人間は、採用する社会的カテゴリを組み直すことによって、相互関係における葛藤や対立を調停ないし回避することも行います。巷間いわれる「共生」とは、そのようにして新たに文化を共有し直すプロセスを意味します。

したがって人間の相互関係性を研究対象とする者には、メゾ・マクロレベルの人間の集合的行動において葛藤や対立が生じている場合に、そこでいかなる社会的カテゴリ

りの不一致があるのかを記述・分析することが必要となります。それが〈共生社会学〉の課題です。また、そこにいかなる社会的カテゴリの更新を導くことが出来るのかを探究することが必要となります。それが〈共生教育学〉の課題です。

共生教育社会学研究室では、共生をめぐる議論を視野に入れながら、ナショナルリティ・エスニシティ、ジェンダー・セクシュアリティ、身体、世代、階級・階層の相違による社会的葛藤・対立の分析と、それを克服する社会的行為の可能性について探究しています。「社会的カテゴリの更新としての共生」が、本研究室が想定するヒューマン・ケアのあり方の一つです。

「科学」と「技術」

ところで、「科学」とは現象に論理を後付けする営みであり、「技術」とはその論理を演繹して現象に対して働きかけることでありますが、社会学はそもそもが科学としての営みであり、現象の記述と解釈に徹するという学問的伝統をもっています。社会に関する事実命題（「～である」）を探索し確立することがその本業です。そして事実命題はどこまで展開しても本来は規範命題（「～であるべきだ」）にはなり得ません。事実命題から規範命題への転換は常に行為者水準で行われることであり、観察者水準で行えることは、その転換をさらに記述の対象に含め、現象の推移として表現することに尽きます。

もともと、社会学理論においてもパラダ

イムシフトは生じており、その都度、学としての基本思潮は重層化してきました。1950年代まで隆盛であった構造機能主義に対してはその後、生活世界論、構築主義などからの問い直しが重ねられ、さらに20-21世紀転換期には、社会学においても価値論の復権がなされたとされます。応用社会学の隆盛に見られるように、メゾ・マクロレベルの文化共有の不全問題に対する介入・支援・提言を目的とした「技術としての社会学」も提唱されるに至りました。ヒューマン・ケア科学と社会学研究との関わりは、そのような文脈にも求めることができるかもしれません。

ただし、ある研究活動が運動性をもつことがあったとしても、価値や規範を実践するのはやはり観察者ではありません。それは行為者に届けられることで、あるいは研究者自らが当事者として行為者水準に立つことによって、実践されることとなります。行為者水準と観察者水準を切り分け、かつ両者間での情報の往復を意識化することによって、社会学的研究の拠って立つところがあるといえます。

★共生教育社会学研究室のこれまでの活動の記録は、著者のウェブサイト (http://homepage3.nifty.com/ubiquitous/lab_projects.htm) にまとめられています。